2026 年 3 月 30 日

文教大学
学長　宮武　利江　殿

2025 年度　外部評価報告書

文教大学外部評価委員会
委員長　綿井　雅康

Ⅰ．外部評価委員会の概要

文教大学は、「内部質保証方針及び手続」、「文教大学内部質保証の推進に関する規程」、及び「文教大学点検・評価委員会規程」に基づき、内部質保証の推進に必要な自己点検・評価を、毎年度、全学的に実施している。

2025 年度外部評価委員会では、以下の評価対象を用いて、文教大学が実施した自己点検・評価のうち後述する項目について、今年度は、文教大学の現状確認及び、良い点、課題点の抽出を中心に検証・評価を行った。

Ⅱ．評価対象

評価対象は、以下の４つの項目である。文教大学から提出された「2024 年度点検・評価シート」及びその他参考資料（2021 年度自己点検・評価報告書）に基いて、３ポリシー（ディプロマ・ポリシー、アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー）を踏まえた文教大学の取り組みの適切性について、評価を行った。

（1）基準１　理念・目的
（2）基準４　教育課程・学習成果
（3）基準５　学生の受け入れ
（4）基準６　教員・教員組織

Ⅲ．外部評価委員会からの概評及び提言

（1）基準１　理念・目的

＜評価項目＞
①大学の理念・目的を適切に設定しているか。また、それを踏まえ、学部・研究科の目的を適切に設定しているか。
②大学の理念・目的及び学部・研究科の目的を学則又はこれに準ずる規則等に適切に明示し、教職員及び学生に周知し、社会に対して公表しているか。

【長所・特色とされている事項について】

・各学部・研究科が自律的にそれぞれの特性を生かし、かつ、工夫をしながら、「人間愛」の精神に基づく取組を意識的に実践している。何かを変えなければならないタイミングであったり、課題の

改善を検討したりする際などには、その理念が立ち返るものとして意識されていることが窺える。これは、全学に、その理念が浸透していることの表れであり、学園としての一体感や目指すべき方向性の一致が見られる。

【課題とされている事項について】

・大学の理念・目的、学部・研究科の目的を、学生が理解・認識している程度を測定するとともに、社会的な認識を把握することが、大学独自で取り組む「自己点検・評価」の前提と考える。測定・把握の結果に応じて、改善・向上のための方策を策定し実施するのが望ましい。理念・目的の「周知・公表」という段階からさらに一歩進め、学生、教職員、社会による、「理解・認識」を測定・把握することに重きを置くことで内部質保証の実効性が高まると考えられる。

・国際学部、経営学部では、官民連携や対外的な発信などの学外での交流機会を改善・向上のアイデアとして掲げているが、他学部では、点検・評価シートからはそのような視点での記述があまり見受けらない。大学組織、学生が対外的な交流を重ね、その学習のフィールドを学外に広げていくことは、建学の精神である「人間愛」を培うことにつながるとともに、その存在を広くアピールできる機会とも捉えることができる。持続可能なまちづくりの発展にも寄与することとなり、ＳＤＧｓの理念にも合致した取り組みとも言えるので、その他の学部でも、学外のフィールドを意識した取り組みが点検・評価シートに記載されていくことを期待したい。また、中期経営計画（BUNKYO ACTION PLAN 2025）で掲げる「大学と地域との連携による学内の活性化」も踏まえ、各学部で地域連携にも一層注力いただきたい。

・「育ての文教」と掲げているが、建学の精神である「人間愛」に対する学生の意識や経験、実績をどう評価するかという点は課題と考える。職務上、文教大学の学生に話を聞く機会があり、その内容を踏まえると、入学前の説明会等では大学のポリシー（入学者受け入れ方針）について認識できるが、入学後に「人間愛」の精神がどの程度培われたのかを認識する機会が少ない印象を受けた。協調性や規律性などのコンピテンシーを用いて「人間愛」の精神がどの程度身に付いたかを評価するなど、身に付いた能力を定量的に評価する方法を検討できないか。

・卒業時や卒業後に実施するアンケート等で、文教大学で培った「人間愛」の精神が身に付いているか、同精神を仕事や社会で生かせているか、学生または卒業生による自己評価の結果を把握・分析し、教育の成果として開示することが「育ての文教」というブランド力を高めることにつながると考える。教育課程としては他大学と類似する部分も見られるであろうが、客観的なデータを示す等、教育によるアウトカムを可視化することで文教大学の特色を差別化することが重要である。

・「人間愛」の精神を体現する学生の活動を紹介するなど、建学の精神を実質化（具現化・浸透）させる取り組みをアウトプットできているかという観点から、点検・評価を行うことが望ましい。

・時代とともに「人間愛」のあり方も変わると思われるので、その時代に応じて学長からメッセージを発するなど、学生が「人間愛」の精神について考える環境づくりが必要ではないか。これから生成ＡＩの活用等が成熟期を迎える時代において、人間が担う役割の重要性は改めて着目されると思われるので、「人間愛」の精神は世相に合うのではないか。

・建学の精神である「人間愛」と各学部・研究科の理念との接続については、それぞれの専門領域に応じて工夫が見られる一方、建学の精神と親和性の高い学部等と、客観的に見て親和性が低いと感じる学部等で、接続度合いにばらつきがあると思われる。学部の特性に応じて理念との結び付きを

より明確に示すことが望まれる。建学の精神は、貴大学と他大学の最大の差別化のポイントであり、全学部等で適切に接続し、学内外のステークホルダーに浸透させることが望まれる。その際には、各学部等で建学の精神を体現している卒業生や学生を活用したり、ロールモデルを提示したりし、学生に「人間愛」に関する理解を促し、浸透させることで、リアリティが高まると考えられる。

・各学部等の理念・目的のうち、教育学部の「有為な教育者を育成する」、人間科学部の「人間の総合的理解」、経営学部の「人間尊重の経営」など、やや抽象的な印象を受けるものについて、ロールモデルとなる卒業生の活躍を紹介するなど、人間愛を体現したものを提示しながら、より具体的に噛み砕いて伝えていくことが大事であると考える。教育内容の特色という点では、例えば、経営学部ではＮＰＯ・ＮＧＯなどの非営利団体の視点から公共組織の経営を扱うことなど、他大学の経営学系統学部と差別化できるような内容をＰＲできるとよいのではないか。

・「人間愛」の精神を意識して入学してくる学生がどの程度いるのか、入学時と卒業時の認識にどの程度ギャップがあるのかという点も踏まえ、同精神を体現したものをうまく伝えられれば、大学の理念・目的が学内外に浸透していくのではないか。

【基準１に関する外部評価委員会評価まとめについて】

大学の理念・目的については周知・公開が適切に行われていることが確認できた。一方で、学生や社会における理念の理解・認識の程度を把握する取り組みを更に充実させ、その結果を教育改善に活用していくことで、内部質保証の実効性がより高まることが期待される。

また、建学の精神と各学部・研究科の教育活動との関係については、専門分野の特性に応じた多様な実践が認められる。今後は、その関連性を学生や社会に対してより分かりやすく示す工夫を継続していくことが望まれる。

さらに、理念の理解を深める機会を入学後の教育課程の中で段階的に設けることにより、学生の学びと大学の理念との結びつきが一層明確になることが期待される。

(2) 基準４　教育課程・学習成果

＜評価項目＞

①授与する学位ごとに、学位授与方針を定め、公表しているか。

②授与する学位ごとに、教育課程の編成・実施方針を定め、公表しているか。

③教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

④学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。

⑤成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。

⑥学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。

⑦教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

【長所・特色とされている事項について】

・学生一人ひとりの個性を丁寧に伸ばすことを第一に考え、少人数制での学びの場を設けており、教職員と学生の距離が近い分、密なコミュニケーションが取りやすく、学生への対応も迅速に行われ

ているところは、「育ての文教」の教育力が示されていて良い。

・各学部に学生の「未来」の育て方のカリキュラム（教育学部「「先生の助手」体験プログラム」、人間科学部「ビジネス心理学実習」、情報学部「研究成果の対外発表」、健康栄養学部「予防医学の考え方を取り入れたカリキュラム」、国際学部「ニューヨーク国連研修」、経営学部「公共経営実地演習」、文学部「日本文化研究」など）が構築されており、学生が社会人として自立するための経験を経て、未来への活路を見出すことができる。

【課題とされている事項について】

・入学前研修や新入生研修を各学部等で工夫して実施している点について、工夫として評価できる一方で、学部等によって実施内容にばらつきがある印象を受けた。全学で統一的に実施すべき内容と学部等独自で実施すべき内容で体系立てて整理してはどうか。

・評価項目④については、学部ごとに工夫して科目や学習活動を展開していることが確認できた一方で、取り組みに対する効果検証やＰＤＣＡサイクルに回っているかは、各学部の点検・評価シート上では確認できなかった。点検・評価シートの文章量は現行の 10 分の１程度でもよいので、客観的なデータも入れて効果検証の結果を第三者に読み取れるように記載することが望ましい。

・評価項目⑤については、成績評価の客観性を高めるため、評価段階ごとの標準的な比率を定め、ＧＰＡを活用することが望まれる。この意見は、学位授与に相応しいＧＰＡの基準を示すことを想定している。

・ＧＰＡは一般的に全ての修得科目の平均で算出されることから、企業等の採用選考時では教育課程におけるコアの部分に対しての学習成果を判断しにくく、学生の優れた面を示せないのではないか。情報学部では、主専攻・副専攻認定制度があり、自分が学んだ領域を明確に示すことができるようなので、他学部においても参考事例になるのではないか。

・評価項目⑥について、学習成果を学位授与方針に従って客観的に把握することが求められる。把握した結果に対して評価を行い、改善に取り組む必要がある。いくつかの学部においては、資格取得をもって、成果達成とする考え方がみられたが、成果の達成指標として最適かどうか更に熟慮を重ねていただきたい。

・学習成果の把握・評価について、客観的なデータが示されていない点は課題である。学位授与方針に定めた態度・能力・知識等の修得程度を、できるだけ客観的に評価・測定する仕組みや方策を検討すべきだと考える。アセスメントポリシーを踏まえ、客観的なデータに基づいて、一人一人の学生が修得した科目とそれ以外の学修を通じて、学位授与方針で示した態度・能力・知識等がどの程度身に付いたかを可視化していく取り組みが求められる。

・各学部で工夫していることは読み取れるが、全体的に学習成果の評価・測定方法が確立できていないことを把握できた。各学部で教育課程の特性も異なるため、学部独自での評価方法が必要となる点は理解できるが、全学的な共通の評価指標や評価方法も必要ではないか。学生の学習成果を測る共通の物差しが無いと、教育改善に資する全学的な議論が困難ではないか。

・授業の内容や形態等に関する文部科学省のガイドラインを踏まえ、学び方や教え方の新しい形を模索し、工夫することは大学の恒常的な課題である。学生の声も踏まえ、企業や社会から求められる能力を把握し、ＦＤ活動等を通じて学内（全学的）に伝え、教育内容の改善等に取り組む必要があると考える。全学的なＦＤを統括する部局や教学責任者が主体的に取り組む必要があるのでは

ないか。例えば、大学として生成ＡＩをどこまで教育に活用するのかという課題があれば、学部だけに任せるのではなく、全学的に大学としての方針策定を検討する必要があると思われる。全学的に取り組む課題があり、さらに学部等で独自に取り組む課題があるという２層構造で教学マネジメントが機能することが大切と考える。

・評価項目⑦の点検・評価は、学部等の学位授与方針に定めた態度・能力・知識等の修得・到達状況、外部（卒業生の進路先等）や卒業生（卒後数年以降）からの情報収集等のデータをもとに行う必要があり、卒業時アンケートによる情報の他にも情報を収集し、評価に活かすことが望まれる。

・効果検証の結果がいずれも満足ではない結果となっている。新たな取り組みを始めたばかりであるため、やむを得ないところがあるが、学習成果の測定のモデルとなる取り組みをいずれかの学部で実践してみるなど、作成したルーブリック等の効果検証にも努めていく必要がある。

・学習成果の可視化について、学部・学科等によって導入レベルやツールにばらつきがあり、全学的な統一したベースとなる物差しが存在しない。全学的な共通の物差しの上に学部ごとの特徴に応じた指標（例えば、健康栄養学部の管理栄養士コンピテンシー評価等）を設けることが望まれる。

・大学の学位授与方針に「問題発見・解決力」とあるが、それに応じた、実践的な学生主体の授業形態の導入・活用を更に図ることが望まれる。文科省や自治体はＰＢＬ型（課題解決型・問題解決型）授業を推奨していると思われるので、実質的に推進できたらよいという趣旨である。

・社会に出て活躍しうるための基礎力として、これからは全学部共通のＤＸに関連する知識の習得が必要と思われる。情報学部の有する知見・ノウハウなどを他学部の授業科目に生かすなど、社会の変化を踏まえた教育内容の検討が期待される。

【その他】

・入学前研修や新入生研修など、各学部等で採用している良い手法（ベストプラクティス）を全学的に展開することで、更に高い成果を出せるのではないか。

・社会人として自立するために必要な経験を得る取り組みとして、大学や学部等の教育目標を達成するために機能しているかという問題意識から、今後、グローバル化対応策として、「学生の社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を育成する教育の適切な実施（評価項目③の評価の視点）」において、国内外のプログラム実施後に参加した学生の意識向上や成長に繋がっているのかを把握し、学生の声が反映されるプログラムとなるよう更なる工夫が望まれる。

・長所として、学生が社会人として自立するための経験を経て未来への活路を見出すことができる各学部の取り組みを挙げたが、このようなプログラムの終了後、アンケートを実施し、その結果をリフレクション・ディ（学修履歴を振り返る活動）で活用するなど、次回以降の改善に繋げられるとよいのではないか。なお、改善した点を、学内外に公表できるとＰＤＣＡサイクルを適切に回すことにもなると考える。

【基準４に関する外部評価委員会評価まとめについて】

学位授与方針および教育課程の編成・実施方針に基づき、カリキュラムマップの作成やルーブリックの活用等、学習成果の可視化に向けた取り組みが進められていることを確認した。少人数教育を基盤とした学修支援体制は、学生に対するきめ細かな対応につながっており、貴学の教育の特色として評価できる。

一方、学習成果の把握については、各学部において様々な工夫が見られるが、全学的な観点からの指標の整理や結果の活用方法については、今後さらに検討の余地があると考えられる。

学位授与方針に示された能力の到達状況については、可能な範囲で客観的な資料に基づいて把握し、その結果を教育課程の改善に結び付ける仕組みを明確化することにより、内部質保証の取り組みが一層充実することが期待される。

また、教育活動の成果について、卒業生の進路状況や外部からの意見等の情報を参考にしながら検証を行うことにより、教育の質の向上につながるものと考えられる。

(3) 基準５　学生の受け入れ

＜評価項目＞

①学生の受け入れ方針を定め、公表しているか。

②学生の受け入れ方針に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や運営体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。

③適切な定員を設定して学生の受け入れを行うとともに、在籍学生数を収容定員に基づき適正に管理しているか。

④学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

【長所・特色とされている事項について】

・今後の少子化による志願者数の減少を見据えた取組が取られており、いずれも危機感を認識しながら、戦略的な取組を進めていこうとしている。

【課題とされている事項について】

・全国的な傾向と同じく、指定校推薦や総合型選抜に依存する傾向が見受けられる。文教大学ならではの戦略が見えづらい。「育ての文教」と言われるメリット、「人間愛」の精神に基づく特色ある学び、それぞれの立地条件を生かした学部ごとの戦略など、更なる検討が望まれる。

・一部の学部・学科等で、定員未充足が生じている。今後、一層の人口減少局面を迎えるにあたり、定員管理についてはより留意が必要である。

・人口が減少する中、学生募集における年内入試での学生確保が重要になると考えられ、年内入試制度のより一層の工夫が必要である。貴学の求める学生像との接続ができる入試制度（建学の精神「人間愛」に共感し、その精神を体現・実践しようとする学生を受け入れることができる入試）の新設など、検討の余地があると考えられる。

・高大連携の更なる拡大と実質化により、確実な学生確保に繋げることも考えられる。例えば、高大連携で授業を受けたことがあるなど、文教大学の教育活動に直接触れた経験がある生徒を対象として設計された入試の検討などが挙げられる。

・付属校との連携による内部進学者増に取り組むことを検討してはどうか。

・外部の市場調査等を全学的に実施することを検討してはどうか。

【その他】

・減少傾向だった志願者数が、2024 年度は増加傾向に転嫁した理由として「併願制度導入」を挙げ

ている学部があるが、より詳細な分析に基づく今後の対策が志願者を確保する上で重要と考える。
・志願者数を伸ばすことだけではなく、どうすれば大学が掲げている「３つのポリシー」に沿った学生がより多く出願するための方策の検討が必要と考える。
・評価項目④の「適切性」について、入試情報（入試種別や出身校）ごとに学生を分類し、ＧＰＡ等に基づく成績、休・退学者や成績不振の傾向にある学生の人数、学修や大学生活に対する満足度、進路状況などについて、総合的に比較分析を行ったうえで、ＡＰに基づいて、適切に入学者を確保・選抜しているのかを検証することが望まれる。また、各種分析を通じて、各学部のロールモデルになりそうな学生を見出していくという視点も必要と考える。
・建学の精神「人間愛」に接続しうる入試という点で、入学選考過程で学生を育てるようなコンセプトの入試があるとよいのではないか。選考時の課題や面接や通じて、高校生が普段の授業では経験できないことを学び、興味・関心を広げながら、大学入学後に本格的に探究をしてもらうという発想である。（情報学部情報システム学科の総合型選抜「課題遂行型」が該当するかもしれない。）
・高大連携については、高校への出前授業、高校生への大学設備（図書館等）の開放などが一般的だが、大学学生も高校への出前授業に参加することで、先生が実施したい活動や卒業研究に関するデータ取得など、大学側と高校側の双方に実りあるものになるかもしれない。
・大学側の補足説明を踏まえると、高大連携や地域での課題解決型演習は、特定の学部や教員個人の取り組みに留まっている面もあるようなので、ヨコ展開のうえ全学的に実施できるような体制を構築できると良いのではないか。
・ゼミで先輩が取り組んでいた地域の課題解決型演習を後輩が引き継ぎ、大学と地域の連携が世代を超えて継続されていくことは、学生募集やキャリア支援にも良い影響が生まれるかもしれない。

【基準５に関する外部評価委員会評価まとめについて】

学生の受け入れ方針に基づく入学者選抜は適切に実施されていると認められる。今後は、入学者の学修状況や進路状況等のデータを活用し、入学者選抜方法と教育成果との関連を検証していくことにより、アドミッション・ポリシーの妥当性を継続的に確認していくことが望まれる。

また、少子化の進行を踏まえ、高大連携の充実や大学の特色の発信を通じて、貴学の教育理念に適合する学生の受け入れを一層促進することが期待される。

(4) 基準６　教員・教員組織

＜評価項目＞

①大学の理念・目的に基づき、大学として求める教員像や各学部･研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。

②教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。

③教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。

④ファカルティ・ディベロップメント（ＦＤ）活動を組織的かつ多面的に実施し、教員の資質向上及び教員組織の改善・向上につなげているか。

⑤教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

【長所・特色とされている事項について】

・教員の若返りなど、中・長期的な組織としての課題が認識され、これを意識した取組を進めようとしている。

・大学として求める教員像や各学部等の教員組織編成方針に基づき、公平な教員採用を実施している。

【課題とされている事項について】

・社会の変化に対応した評価方法や組織のあり方について、引き続き、検討を進める必要がある。

・「教員組織編制方針」の徹底により、引き続き年齢バランスの是正に努める必要がある。

・基幹教員制度の活用をはじめ、教員組織の構成と教育目標との関連を整理し、社会との接続や学位授与方針にある「問題発見・解決力」のある学生の更なる育成が望まれる。

・「求める教員像」について、各教員がどの程度「達成・合致」しているのか確認、検証することが望まれる。「育ての文教」を掲げながら、教育に関心が低い教員の採用は矛盾するため、組織としての理想を示したうえで、採用面接でしっかりチェックする事項を整理してはどうか。例えば、建学の精神「人間愛」に関する文章を事前に読んできてもらい、面接の場で建学の精神を踏まえた教育をどのように実践するかを語れない教員は採用することは難しいと思われる。その他には、社会連携に関わる教育・研究活動の実績を確認するという視点もあるのではないか。

・「求める教員像」と採用・昇任との関連を、客観的に示すことを検討してはどうか。

・ＦＤ・ＳＤ研修については、各学部等でも実施されているが、内容等についてばらつきがあると思われるので、全学的なＦＤ・ＳＤと学部等ごとのＦＤ・ＳＤの住み分けと効果的な実施を検討していく必要があると考える。

・ＦＤ活動に関して、大学全体としての方向性や取り組むべき課題、学部ごとの方向性や課題など、具体的な内容を明示していく必要性があると考える。

・「教育能力の向上」「授業方法の開発」について、初等中等教育におけるタブレット利用や電子教科書の普及を踏まえれば、教育のＤＸ化を推進するＦＤが必要不可欠である。

【基準 6 に関する外部評価委員会評価まとめについて】

教員組織の編成および教員の採用・昇任は、定められた方針に基づき適切に行われていることを確認した。今後は、求める教員像と教育活動との関係を整理し、その成果を教員組織の改善に活用することで、教育の質の向上につながることが期待される。

また、ＦＤ活動については各学部で実施されているが、全学的な方針の下で共有を進めることにより、教育改善の効果がより高まるものと考えられる。

Ⅳ. その他の提言

・基準 1 は、学部・研究科の目的を変更・修正した場合に、自己点検・評価を実施するなど、自己点検・評価を毎年行う必要があるかどうか、検討してはどうか。同様に、基準 4 の評価項目①②③は、一度自己点検・評価を実施した後は継続されるものであり、毎年の点検・評価が必要かどうか検討してはどうか。項目の性質に応じた重点化や実施方法の整理を行うことにより、より実効性の高い内部

質保証の運用となることが期待される。

・点検内容によっては、記述された取り組み等を裏付ける客観的な根拠資料やデータが不十分であるものが見受けられたので、改善が望まれる。

・基準または評価項目ごとに、全学部をまとめて表記する形式でもよいのではないか。点検・評価の項目を厳選し、より「深く」点検・評価をおこなうことも検討されたい。

・点検・評価の方法について、全学的に一定の指標の統一化を図ることが望ましい。活動指標、成果指標のそれぞれを定め、できる限り定量的な指標を設定できるような評価があれば、一覧性の高いものとなる。これにより、各学部の成果の比較、経年変化、それぞれの長短を網羅的に確認でき、より実効性の高い評価を行うことが期待できる。

・中期経営計画におけるアクションプランとの連動性や、相関関係については、必ずしも十分に明確とは言えない状況が認められる。同計画の確実な実行が、将来の学園経営を支えるものであることを踏まえ、同計画への貢献度合いを把握するための指標の明確化が望まれる。キャンパスを越えた他学部の学生との交流や、他学部の授業の受講など、なるべく多くの人（教職員・学生）と触れ合うことで建学の精神「人間愛」もより育つものと期待できる。

・点検・評価シートにおける、評価の視点について、自己評価「Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ」の基準に数値目標を設けることができれば、結果報告も評価結果も判定しやすくなるものと期待できる。

・点検・評価シートの評価結果をみると、Ａがつく評価項目や評価の視点が多い傾向にある。ＢやＣがつく項目が一定数あることは、点検・評価が適切に機能していると言える。課題を洗い出し、改善につなげるというプロセスは本来やりがいを感じるものではないか。

・現行の対応では、点検・評価シートを作成することが目的化していないか。活動指標や成果指標を設定して点検・評価を実施できれば、各学部は指標に対する数字や実績を客観的かつ端的に記載するのみで、長い文章を書く必要はないと思われる。質的な評価や現状説明については、全学の点検・評価を担う委員会や部局が必要に応じて文章でまとめることも考えられる。

・少子化の更なる進行により学生の確保が今後、一層重要な課題となる中で、大学として就職やキャリア形成に関する支援を充実させる取り組みが必要ではないか。教育学部で培ってきた教員採用に係る指導のノウハウや改善に向けた取り組みで、他学部にも生かせるものがないか考えてはどうか。

以上、本委員会は、貴学が実施した自己点検・評価の結果について、資料確認および意見交換を通じて検証・評価を行い、本報告書を取りまとめた。

貴学においては、全学的に内部質保証の体制が整備され、継続的に点検・評価が実施されていることを

確認した。本報告書に示した内容が、今後の教育研究活動の更なる改善・向上に活用され、貴学の特色である建学の精神に基づく教育の一層の充実につながることを期待する。

本外部評価が、貴学の自律的かつ継続的な質保証活動の推進の一助となることを願い、本報告書を提出する。

Ⅴ．2025 年度文教大学外部評価委員会委員

所属	役職	氏名
十文字学園女子大学	副学長（企画・就職担当）兼　学長補佐	●　綿井　雅康
草加市役所	総合政策部総合政策課長	生亀　勝
足立成和信用金庫	人事部部長	鈴木　透
実践女子学園	理事（経営企画　人事企画　社会連携推進　国際交流推進　広報・渉外担当）	周東　正紀

※委員長：●印

以上